2018年5月20日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「エステル、ユダヤ民族を救う」**

聖書箇所：エステル記7:1-10

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　エステル記というのは聖書の中では歴史書と言われるサムエル記、列王記、歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記の後に出てきます。イスラエルの歴史の一部としてこのペルシャ支配時代のことと理解されたことからでしょう。ヘブル語の聖書は「諸書」の一部とされています。聖書の文書一つ一つは巻物になっていましたのでこれをヘブル語では「巻物」＝「メギラ―」と言います。ユダヤ教の伝統のなかで「メギラ―」と言えばこのエステル記を指すようになっていきました。エステル記はペルシャの時代、ハマンという大臣がユダヤ人をすべて抹殺しようとしたところを王妃となっていたベニヤミン族の子孫モルデカイが世話をした従妹エステルがペルシャにおけるユダヤ民族を救う、という物語ですが、ユダヤ民族のお祭りの一つであるプリム祭に必ず読まれることになっています。今も続いています。プリム祭というのはユダヤ暦12月、太陽暦2-3月に行われる祭りでカーニバルのような羽目を外すお祭りです。民族の解放を祝う、ということになっています。子供は仮装して、騒音を立てる道具をもって集まり、ユダヤ民族を全滅させようとしたハマンの名が出ると騒ぎ立てる、ということをします。そして二日に亘る祭りの初日は家庭に帰ってきたらお酒をいくら飲んでも良い日、ということになっています。「モルデカイに祝福あれ」と「ハマンに呪いあれ」の区別がつかなくなるまで飲んでよい、というのがタルムードの教えの文書にあるそうです。ただし、宗教的意味も持っており、祭りの前日は断食、そして貧しい人に施しをするのが義務になっています。民族解放のお祝いとともに助け合い、生きて行こう、ということなのでしょう。エステル記は10章の比較的短い文書ですが、このギリシャ語訳にはヘブル語聖書には含まれない部分が6か所あります。その中には「モルデカイの祈り」とか「エステル」の祈りとかモルデカイがエステル記に書かれていることを夢で見た、とか、結末として夢が実現したことを述懐する話等があります。しかし、物語の「すじ」には影響はありません。従って、今日のお話はヘブル語聖書に記述されている部分だけでのお話し、とします。

　まずこの物語の時代背景はどうでしょうか。BC597にユダ王国の主要な人物は新バビロニアによって捕囚の民とされました。バビロニアの首都バビロン等に強制移住され奴隷的身分とされました。その後、新バビロニアはペルシャに滅ぼされます。その王クロスは宗教的寛容策をとり、ユダヤ人の一部にエルサレムに帰ることを許可します。エズラ、ネヘミヤはエルサレムに帰り、神殿建築を行った人たちです。しかし、メソポタミアの地に残ったユダヤ人も多くいました。むしろ、捕囚の地に留まった人の方が多かったようです。ペルシャ王国4代目の王がギリシャ語名でクセルクセス、ヘブル語名でアハシュエロスと言います。エステル記はこの王の時の話です。ペルシャ建国後70年くらいの時になります。ペルシャ帝国はギリシャに進出を図ろうとしましたが、団結したギリシャに敗北し、ヨーロッパ進出は果たせませんでした。しかし、ペルシャは広大な地域を支配する大帝国には違いありません。ペルシャ帝国にはいくつかの首都がありますがその一つシュシャン、ペルシャ語ではスサでの話です。これから150年後くらいにアレクサンダー大王が出て、ペルシャ帝国を滅ぼすことになります。エルサレムでは学者のエズラが帰還し、ユダヤ教の基礎を築いた頃です。神殿再建は停滞しています。エルサレムではなかなか希望が現実化していない苦難の時期ですがエステル記のシュシャンの方は、危機的状況が逆転し、ユダヤ民族が救われた出来事がありました。この話はBC5cの前半の話ですが、具体的文書になったのは、暫くして後だと思われます。極端な説には、アレクサンダーの後のシリア支配の時期という説もあります。これでは文書化は伝承の始まりの300年もあとになります。もっと前だと思います。アレキサンダーの前を想定すべきだ、と考えます。

　本文に入ります。ペルシャ王アハシュエロスはシュシャンの城で7日間の宴会を催します。王の妻ワシュティは美人であり、別途、婦人たちの宴会を催していました。王は宴会の最後の日に妻を自慢するため宴会に呼びます。王妃はこの要求を拒否したため王は怒ります。王の側近はこれを認めれば世の妻は夫を軽んずるようになるので別の王妃を探し、現在の王妃の地位をその女に譲らせるべきである、と進言し、そのようになります。この時の王の宴会がプラム祭りの開放性に類似しています。このワシュティの態度は現代のフェミニストには喝采を浴びてるようですが、当時のペルシャ王妃がそのようなことをしたとは考えにくい、のが正直なところです。もしかしたら、宮廷内の王に対する反対勢力が王妃を担ぎ出そうとしていたのかもしれません。それにしても王妃は無謀なことをしました。ここにシュシャンの城にモルデカイというイスラエル人がいました。城に居た、と言われていますので、地位の高い役人にまで出世していたと思われます。彼の曾祖父キシュはユダ王国の最後から二番目の王エコヌヤ即ちエホヤキンといっしょに捕囚にあった人物です。モルデカイは従妹のハダサ、ペルシャ語名はエステルという娘を両親が死んだとき引き取っていました。エステルというのはペルシャ語で「星」という意味だそうです。ちなみに1906年太陽の回りを回る小惑星が発見され「エステル」と名付けられています。エステルも城に集められます。そこで、本件責任者のヘガイという役人の眼鏡（めがね）にかない、召使を与えられ、婦人部屋に入れられました。彼女は身分を明かさずにいました。そして王に召され気に入られます。2:17で「王はほかのどの女たちよりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と恵みを受けた。こうして、王はついに王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした」と言われています。シンデレラ物語です。モルデカイは王の門のところで宦官2人が王を殺そうとしているのを聞き、エステル経由王に伝えます。これにより王は命拾いします。このことは後に、ユダヤ民族を救うことと関連を持ちます。

　この後、王はアガグ人ハメダタの子ハマンを重んじた、と言われています。アガク人という民族はおりません。ヨセフスというユダヤ古代史の著者はアマレク人アガグのことと言っています。これは第一サムエル記15章に出てきており、イスラエルの敵です。ギリシャ語訳のエステル記ではマケドニア人となっています。まだアレキサンダー大王が出てくる前ですから、マケドニアと言うのは時代が合わないように思います。役人みんながハマンにひれ伏すのに、モルデカイはひざもかがめなかった、と言われています。このことをハマンが聞くとペルシャ王国中のすべてのユダヤ人を根絶やしにしようとしました。くじをひいて実行日を決めました。第十二の月の十三日です。このくじをペルシャ語でプルと言い、このことばの複数形がプラム祭のプラムとなったとのことです。語源的には更に古いアッカード語に由来する言葉のようです。第十二の月の十三日はプラム祭の前日で断食をする日です。ユダヤ人抹殺の布告が発布され、シュシャンの町は混乱に陥ったと記されています。布告の発布は第一の月の十三日です。11か月後に実行という訳です。

ギリシャ語訳にモルデカイの祈りとエステルの祈りがあります。モルデカイはひざをかがめなかったのは高慢からそうしたのではなく、「神の栄光の上に人の栄光を置かないためでした」と言っています。また、「主なる神よ、アブラハムの神である主よ。今、あなたの民を救い出してください。---あなたをたたえる者らを絶やさないでください」と祈っています。そして「全イスラエルは死を目前にして、必死に叫んだ」と記されています。エステルも「すべてに勝って力ある神よ、絶望のうちにある者の声を聞き、悪を行う者の手から私たちをお救い下さい」と祈っています。実はエステル記のヘブル語原本には主なる神ヤーヴェの名が出てきません。聖書の文書としては少しかありません。「ヤーヴェ」は神聖文字とされ、むやみに使ってはならない、とされていたので、エステル書のような異教徒のやったことを記述する文書に使用するのは好ましくないからだ、とユダヤ教は伝えています。それはそうかもしれませんが、ギリシャ語訳では「キューリオス」即ち「主」という言葉がしばしばでてきます。またヘブル語のエステル記でも内容はイスラエルの神「ヤーヴェ」を意識している箇所がいくつもみられます。あまり特別な事として考える必要はないと思います。「見えざる神」の力を示している文書だからという説明もあります。

エステルは城の外にいるモルデカイにこの状況を変える知恵を求めます。モルデカイは王に憐みを求めるよう頼み、4:14で「もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない」と言っています。王の近くという立場にあるのだからいまこそその立場を使って、ユダヤ民族のために立ち上がってくれ、という懇願です。「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない」という言葉は我々にも投げかけられている言葉のように思われます。神の出来事には「時」がありますが、私たちはそれを鋭くキャッチしなければなりません。エステルはユダヤ人全員で自分のために祈ってくれ、と願います。そして「私は、死ななければならないのでしたら、死にます」と決意を示します。エステルは王の玉座のある前の内庭に立ちます。王は「どうしたのだ」と問います。エステルは宴会を開きますのでハマンといっしょにいらしてください、と言います。ハマンは喜びましたが王の門の所に居るモルデカイが癪にさわってしょうがありません。妻ゼレシュらに相談すると柱につるして殺したらよい、と勧められます。この柱は22メートルもの高さのある巨大なものです。ハマンはこの忠告が気に入って柱を立てさせます。

宴会の前、王は眠れなかったのでペルシャ王国の「年代記」を読みました。すると、先程お話しした、モルデカイが王暗殺計画を王に事前に知らせたので助かった、という記事をよみました。おそらく、これまでは、モルデカイが知らせてくれたのだ、ということを知らなかったのだろう、と思います。そこにハマンが来たので、王は「栄誉を与えたいと思う者にはどうしたらよかろう」と相談します。ハマンは王が自分のことを考えて居るのだと思い、6:7-9で次のように勧めます。「そこでハマンは王に言った。「王が栄誉を与えたいと思われる人のためには、 8 王が着ておられた王服を持って来させ、また、王の乗られた馬を、その頭に王冠をつけて引いて来させてください。9 その王服と馬を、貴族である王の首長のひとりの手に渡し、王が栄誉を与えたいと思われる人に王服を着させ、その人を馬に乗せて、町の広場に導かせ、その前で『王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである』と、ふれさせてください」とあります。そして王は「ユダヤ人モルデカイにそうしなさい」と命じます。仕様がありませんのでハマンはそうします。そして妻ゼレシュ等にこのことを話すと“あなたはモルデカイにまけた”と宣言されてしまいます。この辺の所はちょっと出来過ぎの感が否めません。本当の悪者なら、もう少し、あがきが在るような気もします。とにかく宴会に出かけなければなりませんので出かけます。

　そして今日読んだ箇所になります。酒宴の二日目に王はエステルに何か願い事があるのか、王国の半分でもかなえてあげよう、と再度言います。プラム祭は二日ですから、この二日目ということです。王妃エステルは答えます。7:3です。「もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。 4 私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、殺害され、滅ぼされることになっています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたでしょうに。事実、その迫害者は王の損失を償うことができないのです」と記されています。「私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、殺害され、滅ぼされることになっています」とありますが、この「根絶やし」と言う言葉は3:6、3:13にも出てきた言葉です。8:11にも出てきます。エレミヤ哀歌の3:66では「主よ。御怒りをもって彼らを追い、 天の下から彼らを根絶やしにしてください」と言われており、非常に強い言葉です。ヘブル語で「シャーマド」という動詞で絶滅する、の意味です。7:4ではこのあと殺害を意味する「ハーラグ」、そして再び絶滅を意味する「アーバド」がでてきます。ここで、どうしても、第二次大戦におけるナチスのユダヤ人絶滅計画を思い出します。欧州におけるユダヤ人迫害はどこからくるのか、というのはわれわれにとっても謎ですが、エステル記では実行されずに終わった絶滅作戦がなんと20世紀になって実行に移されたのです。もちろん大部分のドイツ人は、詳細は知らされていなかったのですが、迫害するに至る気分は充満していたはずですし、民族の責任は、自分たちは知らなかったでは済まされません。ドイツ民族はこれを自らの十字架として負って行かなければならない、と決意しており、なにかをすることによって「お金を払うので、もうこれで終わりにして下さい」などというどこかの首相のような馬鹿げたことは言っておりません。日本の場合もアジア諸国の民に残虐なことを行ったことはまぎれもない事実であり、まだ100年にもなっていないで「もう決着済みだ」というような態度をアジア諸国の民衆が許すはずはありません。卑怯です。中でも日本人の場合は中国人、朝鮮人について言えます。朝鮮人については在日朝鮮人に対する日本政府や国民の一部のやり口は唖然とするしかありません。一部右翼のやり口を政府は放置しています。ひどい話です。本来であれば韓国籍の人を含む在日朝鮮人については、日本国籍も与え二重国籍を例外的に認めるべきである、と考えますが、日本政府は検討もしません。ナチスのユダヤ人迫害と類似の国民的雰囲気が日本人にもあるのです。

　この話をしだすと止まりませんので次に行きます。このようなエステルの答えにアハシュエロス王は「だれがそんなことをしようとしているのだ」と問います。エステルは「その迫害する者、その敵は、この悪いハマンです」と答えます。王は怒りを抑えられず、宮殿の園にでていき、落ち着きを取り戻し、戻ってきます。腹心がそのような恥ずべきことを計画していたなど王は思いもよらなかったにちがいありません。戻って来るとハマンがエステルが居た長椅子の上にひれふしていました。ハマンがエステルに命乞いをするためそこに居たのですが、王は王妃に乱暴をしようとしている、と誤解したのだと思われます。死刑の直前にするようにハマンの頭は袋で覆われました。そこにいた宦官の一人ハルボナはちょうどハマンが死刑用の柱を用意してあります、と言ったので、王はそれにハマンを掛けて死刑にしてしまいます。この宴会で大逆転劇が起こり、ハマンは死に、モルデカイ、エステルなどユダヤ民族は助かります。このあとはモルデカイがハマンに代わって王の側近となり、先般のユダヤ人絶滅の詔書の撤回の詔書を発します。8:11ではその詔書の中で「どこの町にいるユダヤ人にも、自分たちのいのちを守るために集まって、彼らを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、殺害し、滅ぼすことを許し、また、彼らの家財をかすめ奪うことも許した」と記されています。今度はユダヤ人を襲う部族を絶滅させる権利を認めました。新約の世界ではイエス様の「復讐は主のなすこと」という原則が明確にありますが、このエステル書の時代はまだこのような論理が生きていました。そして8:17で「ユダヤ人は喜び、楽しみ、祝宴を張って、祝日とした」と言われており、今のプラム祭につながります。9章ではユダヤ人がその敵を滅ぼすことが記述されています。しかし、基本はハマンの家系を絶やすことにあり、見境なく略奪、殺害を行ったわけではありません。また9:22では「自分たちの敵を除いて休みを得た日、悲しみが喜びに、喪の日が祝日に変わった月として、祝宴と喜びの日、互いにごちそうを贈り、貧しい者に贈り物をする日と定めるためであった」といわれており、今のプラム祭においてもプレゼントをあげること、貧しい人に施しをする慣行として続いています。最後にモルデカイを讃える言葉でエステル記は終わります。ギリシャ語訳はこのあとに神の救いがイスラエルに臨んだこと、プラム祭の定めについて再確認しています。ヘブル語エステル記の最後で言っていることを、神信仰の立場から再叙述しているものです。

　エステル記から私たちは何を読み取るべきでしょうか。祈りに支えられた希望への信頼でしょうか。異邦人ペルシャ王に働く神の力についてでしょうか。モルデカイ、エステルの熱心な叫びと言うべき祈りの姿勢についてでしょうか。すべて、そのように諭されている、と思われます。しかし、私は、民族を絶滅させよというところまでに行ってしまう人間の罪の深さを知るための物語り、という気がします。第二次大戦後になってもこれはやみません。かつてのユーゴスラビアにおける民族虐殺、アフリカにおける宗教対立に名を借りた部族間の憎しみ合い、はては近年のイスラム国爆撃とテロの応酬、等々です。どうして「報復は主の業」という委ねる気持ちになれないのでしょうか。実は自分の中にも「許せない」という気持ちがしばしば起きます。もちろん刑罰の根本には報復の要素が根深くあります。赦しの心をお与えください、とまでは言いません。せめて委ねる心をお与えください、と祈りたい、と思います。

（ご在天の父なる御神様、今日の礼拝の時を感謝致します。本日は聖霊が下り給うたペンテコステの記念礼拝です。エステル記から主なる神が、絶滅の危機にあったユダヤ民族を救われたことを見ました。ペンテコステの日に主が聖霊を通して使徒たちに使命をお与えになられたのと同様に、主の霊がペルシャ王に働き、ユダヤ民族が絶滅より救われ、ユダヤ民族には人間の罪からへの救いを証する使命が与えられました。しかし、ユダヤ民族はその任を荷えず、我らの主イエス・キリストが十字架をもってこれを荷われ、私たち新しきイスラエルに救いの道を証する使命を与えられました。どうぞ、一切を主に委ね、救いの証人として歩まさしめてください。主のみ名により祈ります。アーメン）